

日本酒大航海？

こんにちは！ 暑い暑いと思っていたら一転して秋の気配がやってきました。

前号は堅苦しい話になってしまいましたので、今号は柔らかい？お話しを・・・。
新年号でパラオ大使とお会いしたときのお話を書きました。まずはその後日談です。

パラオ大使はとも日本酒がお好きで、日本食大好きな方でした。その大使に日本酒をプレゼントしたところとても喜ばれてそのお酒を太平洋諸島の大使たちが集うパーティの折に持ち込んだのだそうです。そして大変な好評で「こんなお酒をどこで手に入れたの？なんで貴方がこのようなお酒を知っているの？」と随分うらやましがられたそうです。その大使も任期を終えられ、いまは自国に戻り、お元気にされているそうです。

それから日本酒ってやっぱり世界共通に愛されるお酒なのだ！と実感したお話をもう一つ。
当社がバックアップしているNPOが主催する「アフリカ水族館プロジェクト」のキックオフミーティングのパーティの折に、メーカー様方の協賛をいただき、日本酒の試飲会を行いました。

このプロジェクトに賛同されたケニア、エチオピアなど5カ国のアフリカ諸国の大使と大洋州のパプアニューギニア大使、その他関係者が出席していたのですが、大使たちは日本酒にとっても興味を持たれ、次々に試飲をしてはご自身の好みのお酒を探し、ご機嫌な様子でした。協賛いただいた皆様にはこの場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

その数日後、今度はプロジェクトに参加されたうち二か国の大使を交え一〇名ほどで東京のフレンチカジュアルのレストランで持ち込んだ日本酒数種と料理のマツチングを行いながらの食事会を開催し、前菜から最後のデザートにも日本酒を合わせて提供していったのですが、お二人とも「このお酒は非常にフルーティだね」「これはドライですっきり感があるね」「このお酒おいしい！どこで買えるの？」と大満足でした。そして、「自分の国でも日本酒を是非造りたい！」と言われていました。もちろんそのようなことは一朝一夕にできることではないでしょうが、世界のあちこちで「日本酒」が造られ、でもやっぱり日本で造る日本酒が一番！というブランドイングもありなのかなーと、ふと思いました。え？大使たちとの会話はどうしてたか？・・・残念ながら身振り手振りカタコト単語&英語の話せる人に通訳してもらいました・・・トホホ、情けない・・・。

日本の野鳥シリーズ

百舌鳥とはおおげさ

技術営業部 佐藤 弘

モズやカケスなど、野の鳥が他の鳥や生き物の鳴き声などをまねる事はよく知られている。北米や南米北部にいる数種のモッキングバード（和名はずばりマネシツグミ）も、他の鳥の声をまねると手元の図鑑にあるものの、具体的に記されていないので実力のほどは分からない。極めつけは豪州のライアバードだろう。こちらは15種類の鳥の声をまねると図鑑に明記されている。

ライアとはうそつきの事かと深読みしたら、スペル違いで堅琴の意味だった。尾羽が堅琴の形をしているところから、そう呼ばれるようだ。和名もそのままコトドリで、外見はクジャクを地味にしたような印象だ。現在ビクトリア州の公園管理をしているニール・マッカーシーが、90年夏から1年間奥さんのマーガレットと共に新潟県十日町市に滞在したおりに、探鳥会でその録音を聞かせてくれた。コトドリは自分の周りの音を何でもまねるらしく、「パシャ」というカメラのシャッター音までおまけに入っていた。

コトドリのオスはいったい何の為にものまねをするのかという、ニールの説明には素直に合点がゆく。即ち、持ち歌が多いベテラン歌手よろしく次々に歌いまくって、自分の成熟ぶりをメスにアピールするのだという。デビューしたての青二才じゃないよ、だから安心してオレについて来なさいと…。どうやら浮かれ気分の鼻歌だとか、カラオケ自慢などではなさそうだ。

さて、いにしえ人に百舌鳥の字を貰ったモズのオスのものまねだが、鳥バカを自認する私でもこれまでに一度聞いたきりだ。中秋の頃に、既に南へ越冬に渡っている鳥のまねをした。断片的に下手くそに。具体的には、サンコウチョウ正調の「ギギ、月日星、ホイホイ」を端折って「ホイホイ」とだけやった。そんな手抜きでメスにモテようたって、ずい分無理があるような気がする。

ちなみに、ビクトリア州内にある公立公園の総面積は360万haだという。どれほどのものか全く見当がつかないので調べてみたら、山形・福島・新潟三県の面積を合せても及ばない規模だ。ニールは管理者の一員として、80人のレインジャーと共に公園の維持管理にあたっているという。頭では分かったつもりだが感覚がついていけない。とにかくスケールが違う。税金を人間サマの為だけではなく、野生生物保護（あるいは駆除）や環境保全にむけて潤沢にまわすことができるこんな国を、真にゆとりのある豊かな国というのだろうと、トキを絶滅させてしまった国の鳥バカは考える。

“ちょっと一息” “日頃の鍛錬”



No.10

事業部 卜・新規事業 PJ 山本知男

今年はアベノミクスやら消費税前倒しやらで、ずっと忙しく仕事やっています。(その割には景気良くなっている実感がないですが・・・)こんなに忙しいのは何年振りかなと言う感じで、有り難い事なんです、個人的には趣味のクラリネットがほとんど吹けなくてストレス溜まっています。

そんな中、先日 2 か月ぶりくらいに練習行けて、久しぶりなので吹けるかなと恐る恐る息を入れてみたら意外に楽に音が出た。それで音階練習して、ますますやれるなと安心して合奏に加わったら、さあ大変。楽譜が読めない!!

ゆっくりなテンポなら読めるけど早くなると付いて行けない。こんなにダメになったんか・・・とガッカリしました。練習を続けていると音符をわざわざ読んで指を動かすのではなく、音符の並びを見ると指が勝手に動いて行く感じで吹いて行けます。つまり音符を見るだけで、読まなくても指が勝手に反応して行く感じなんです、練習しないと音符を読まないと指が動かない。

仕事でも感じる事ですが、私なんかは普段やらない現場作業をたまにやる時があって、その時は手順を考えながら一つ一つ行動して行く。だけど常にやってる人は、状況を見ただけで動きながら考えて進めて行く感じがあります。結果、作業時間には倍ほどの差がついて、しかもキレイに仕上がっている。慣れと言ってしまえばそれまでですが、平日頃の訓練、練習が大きな差になって返ってくる、そんな感じです。練習もしないでいきなり合奏に参加してミジメな思いをする前に、やはり復帰するにはリハビリが必要なんだと痛感しました。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その17 「トレードオフ」

技術営業部 部長 成田 護(mamoru@shinyo.co.jp)



はじめにご案内から。皆さまからご愛顧いただいております「ネオクリーン」ですが、この度、「値下げ」しました。地道に販促に取り組んだ結果、多くのお客様からご支持を頂けるようになり、今回、十分な実績を引っ提げてメーカーとの価格交渉に臨んだところ、仕入れ価格の引き下げにに応じていただけました。

よりお求め易くなった「ネオクリーン」を今後ともよろしく願いいたします。さて、本題。

私の豆知識も底を突いてきたので、今回は興味深い新聞記事の紹介でご勘弁いただきたいと思います。

7月12日の日経 MJ「物流インサイドレポート」欄に次のようなことが書かれていました。

日本の小売業では、接客は丁寧、棚は商品で埋め尽くされ、陳列方法も工夫されている。

一方、世界最強の小売業者として知られる米ウォルマートの店舗は、商品のバラエティーは乏しく、欠品も多い。また、接客や店舗の清掃もお粗末だが、際限のない成長を続けながら 5~6%の利益率を維持している。片や日本の大手量販店は赤字スレスレ。

欠品は在庫量とトレードオフの関係にあるので、欠品率を極端に下げようとすれば在庫量が膨大になり、それだけ売れ残りのリスクが大きくなる。そこで、機会損失と在庫コストのバランスを最適化する必要が出てくるが、日本の会社では、理論上不可能な「許容欠品率ゼロ」が目標として設定されているケースが少なくない。

店舗の在庫スペースは限られているので、卸に対して多頻度かつ即座の納品が要求される。欠品や売れ残りが許されないのは卸も同じなので、卸はメーカーに、メーカーは調達先にと、合理性を欠いた要求がサプライチェーンを逆流していく。各現場にムリ、ムダが発生し、それで儲かるはずがないではないか、という内容でした。

翻(ひるがえ)って、清酒の製造現場。

「あちらを立てればこちらが立たない」のはどこも同じ。昨今の生産現場の人員が減られる状況下では、「どちらを立てるか」の判断が、製品の品質や生産性に大きく影響します。その「どちらを…」を精査しないまま闇雲に突き進むと、忙しい割にちっとも品質はアップしないし、能率も上がらない、おまけに職場の雰囲気も悪くなってきた、なんてことになりかねません。

先の記事にも「許容欠品率の設定には経営判断が必要だ」とありました。高い見識を持った人が、大所高所から「どちらを…」を判断することの重要性を認識した記事でした。

エッセイ

ジブリのアニメは永遠だ

生産部 島貴 修一

宮崎駿の引退というニュースが飛び込んできた。ついにこの日が来たか。でもずいぶんと楽しませてもらった。トトロのマグカップは今でも使っているし、CD プレイヤーから流れる「千と千尋の神隠し」のテーマソング「いつも何度でも」で、毎朝 6 時に起きている。

背景の隅々まで緻密に描写されたジブリのアニメはどれも傑作ばかりだが、その中からお気に入りを選べばトトロとラピュタと豚になる。その次が魔女と千とハウルかな。

「となりのトトロ」の田園風景には、小学生の頃の福島市郊外の風景と重なるものがある。学校の古い校舎もあんな感じだったし、近所の神社の森にも大木があった。「天空の城ラピュタ」には少年の冒険心が描かれており、空を飛び、財宝を見つけ、お姫様(シータ)を助けるために戦うなんて、もう一度あの頃に戻りたい。そして「紅の豚」には中年男のロマンが詰まっている。外見は豚だがポルコはやることなすこと全てかっこいい。作品に登場する飛行艇乗り達のマドンナであるシーナも、見ている私でさえ惚れそうになるような色気が漂っている。だからというわけではないけれど、これは映画館で 2 回見ている。

今でもテレビで繰り返し放映され、何度見ても物語の中に引き込まれてしまう魅力を持っているのがジブリのアニメ。次の世代のジブリはこの人気に安住せず、更に新たなものを創出して魅力あふれるアニメを作り出すと期待したい。それにしてもシーナは素敵だな。